

# 三重県の公共複合施設における共用空間の構成

## COMPOSITION OF COMMON SPACE IN COMPLEX PUBLIC FACILITIES IN MIE PREFECTURE

木下 誠一<sup>\*</sup>、藤枝 秀樹<sup>\*\*</sup>、今井 正次<sup>\*\*\*</sup>  
*Seiichi KINOSHITA, Hideki FUJIEDA and Shoji IMAI*

**Keywords :** *Complex Public Facilities, Common Space, Spatial Composition*  
公共複合施設, 共用空間, 空間構成

### 1. 研究の背景と目的

近年、地方自治体では、保有する公共施設の老朽化や人口減少・少子高齢化等による市民ニーズの変化などに対応するため、ファシリティマネジメントの手法を導入し、公共施設の効果的かつ効率的な施設の整備、維持管理、運営に取り組むところが増えてきている。2014年には、総務省から全国の自治体に対し、公共施設等総合管理計画の策定要請<sup>注1)</sup>があり、長期的視点に立った公共施設等の総合的かつ計画的な管理の推進を求められている。そこでは、財政状況に見合うように公共施設の総量を縮減し、最適配置を実現するために、同種施設の集約化や様々な機能の複合化の取り組みが必要とされている。

また、中心市街地の衰退が深刻化する地方都市では、幅広い利用者が期待できる集客性の高い図書館を核とした複合施設を、駅前や中心市街地に整備する事例も見受けられる（塩尻駅、太田駅、尾張一宮駅など）。公民館や美術館等の公共施設、民間の商業施設等を組み合わせ、それらの相乗効果により、市民の交流を促進し、賑わいを創出しようとしている。

このように、公共施設整備において、複合化は、維持管理コストの適正化やスペースの効率化、多様化する市民ニーズの対応や利便性の向上（ワンストップサービス等）、市民交流や賑わい創出、地域の活性化など、様々な効果が期待されており、今後一層、公共複合施設の整備が進むものと思われる。また、こうした複合施設を計画する際には、異種機能の単なる寄せ集めでは、複合化による相乗効果を期待できないため、相互の機能的連携を図るための空間構成が求められる。この点で、とりわけ機能相互を結びつける共用空間が重要であると考えられる。

複合施設の共用空間は、機能空間（施設の主たる用途に供する空間）をつなぐ媒介的な役割を担い、施設全体としての一体感をもたらす。一般に、機能空間は特定の目的に対応した専門性を有し、グループ・団体での利用や予約利用が主で、利用時間や利用料などの制限がある（図書館は除く）。一方、共用空間は特定の機能をもたず、個人でも予約なしで自由に利用できることが多い。また、機能空間を利用する際の動線の結節点となり、人々が集まって交流したり、活動前後にしばらく滞在したりする場所にもなる。このような共用空間を利用者は自由に行き来することで、来館目的以外の活動に関心が芽生え、相互利用を促す可能性も期待されている。

さらに、共用空間は、個人・団体を問わず多様な人々が日常的に利用できる意味で、広く地域住民に開かれた公共空間として捉えることができる<sup>1)</sup>。孤立しがちな高齢者や子育て中の親子などに対して、外出の機会や社会的接触の機会を提供したり、中高生に対して自宅や学校以外の居場所を提供したりするなど、施設本来の機能とは異なる目的をもった多様な人々を受け止める役割も期待される。日常的に気軽に立ち寄り思い思いに過ごせる場所として、これまで施設を利用する機会の少なかった人々を受け入れることは、従来の公共施設の課題であった利用者の固定化や利用率の低さの改善につながることも期待できる。

このように、複合施設の共用空間は様々な役割を担うことが期待されているが、従来の研究では機能空間に関するものが主であり、共用空間の空間構成のあり方については明確になっていない。そこで、本研究では、公共複合施設を対象に、共用空間の構成について現状を把握・分析することで、設計上有効な知見を得ることを目的とする。

<sup>\*</sup>三重短期大学 生活科学科 教授・博士（工学）

<sup>\*\*</sup>愛知産業大学 教授・博士（工学）

<sup>\*\*\*</sup>三重大学 名誉教授・博士（工学）

Prof., Life and Environmental Science at Tsu City College, Dr. Eng.

Prof., Aichi Sangyo University, Dr. Eng.

Emeritus Prof., Mie University, Dr. Eng.

## 2. 研究の方法

本研究では、三重県内の公共施設のうち、広く市民が利用する施設（図書館やホール、集会施設等）を中心に構成された複合施設を対象とした。また、地域の拠点となりうる公共複合施設の共用空間に着目していることから、まとまった共用空間の面積を確保できる施設規模として、延床面積が1,000㎡以上の施設を対象とした。対象施設の抽出にあたっては、自治体のWEBサイトの施設案内のページを参照した。三重県内の施設を対象にした理由は、地方都市では民間施設に限られており、市民サービスにおいて公共施設の役割が大きいと考えられるためである。この結果、計42施設が抽出された。これらの対象施設について現地調査（期間2017.2～2018.1）により共用空間の現状について把握し、空間構成の分析を行った。

### 1) 調査対象施設の概要（表1）

建築年は、1980年代半ば以降である。延床面積は、1,000㎡以上3,000㎡未満が14施設、3,000㎡以上5,000㎡未満

表1 調査対象施設

No.	施設名	市町	建築年	延床面積 (㎡)	階数 (地上)
1	北勢市民会館	いなべ市	1990	4,301	2
2	藤原文化センター		1988	3,840	2
3	東員町総合文化センター	東員町	1989	5,225	2
4	大山田コミュニティプラザ	桑名市	1993	2,652	2
5	ながしま遊館		2005	5,420	2
6	くわなメディアライブ		2004	8,153	4
7	陽だまりの丘複合施設		2013	1,050	1
8	スター21		1997	1,498	2
9	はまぐりプラザ		2010	1,434	4
10	楠ふれあいセンター	四日市市	2006	1,113	1
11	楠交流会館		1985	1,715	2
12	あさけプラザ		1984	6,392	4
13	ヘルスプラザ		1999	8,694	2
14	三浜文化会館		1990	6,402	3
15	朝日町教育文化施設	朝日町	1997	2,164	2
16	川越町総合センター	川越町	1996	4,441	4
17	鈴鹿市男女共同参画センター	鈴鹿市	2002	3,638	5
18	三重県総合文化センター	津市	1994	46,306	5
19	アスト津		2001	52,166	18
20	津リージョンプラザ		1987	9,584	3
21	津市北部市民センター		1989	1,342	2
22	津市西部市民センター		1991	1,418	2
23	サンヒルズ安濃		1996	7,734	2
24	サンデルタ香良洲		1994	3,440	1
25	芸濃総合文化センター		1996	8,842	2
26	芸濃総合庁舎		2004	6,557	2
27	美里文化センター		1994	1,695	2
28	白山総合文化センター		2004	5,538	2
29	とことめの里一志		1997	4,381	1
30	美杉総合文化センター		2014	2,097	1
31	あやま文化センター	伊賀市	2005	3,099	2
32	ハイピア伊賀		2012	10,249	5
33	ふるさと会館いが		1994	3,180	1
34	青山ホール		1994	2,251	3
35	嬉野ふるさと会館	松阪市	1993	3,681	2
36	明和町ふるさと会館	明和町	1991	1,429	2
37	いせトピア	伊勢市	1997	5,337	3
38	いせ市民活動センター		1984	1,959	2
39	ハートプラザみその		1993	3,855	2
40	磯部生涯学習センター	志摩市	2005	3,770	2
41	ふれあいセンターなんとう	南伊勢町	1995	3,275	2
42	熊野市文化交流センター	熊野市	2009	3,065	2

が13施設、5,000㎡以上が15施設あり、幅広い。階数は、1階建が6施設、2階建が24施設、3階建以上が12施設あり、1～2階建の低層が約7割を占める。

自治体別では、特に、都市部に多く、津市が13施設と最も多い。津市では、平成の市町村合併前の駆け込みで文化施設等が多数整備され、利用が分散化したため、各施設の利用率向上が課題となっている<sup>2)</sup>。

### 2) 用語の定義

複合施設とは、用途による分類である、いわゆる建築種別（図書館、劇場、美術館、学校、病院など）の機能空間が、幾つか一つの建物に共存する合築建築である。

共用空間には、複合施設を構成する幾つかの機能空間を相互につなぐものと、個々の機能空間において諸室相互をつなぐものがあり、施設内で入れ子状に存在する。いずれも、利用者が共通して利用できる空間である。本研究では、施設内の専ら主たる機能の用に供する空間以外で、誰もが予約なしに無料で自由に利用できる空間を対象とした。

表2 施設の機能構成

施設 No.	図書	ホール 劇場	集会 会議	保健 福祉	博物館	スポーツ	行政	業務 商業	その他
1	●	●	●						
2	●	●	●		●				
3	●	●	●						●(市民活動支援)
4		●	●						
5	●	●	●	●					
6	●	●		●				●	
7			●	●		●			
8			●			●			
9			●		●			●	
10			●	●					
11	●	●	●						
12	●	●	●	●		●			
13				●		●			
14		●	●						
15	●			●	●				
16	●	●	●	●					
17		●	●					●	●(住宅)
18	●	●	●					●	
19		●	●				●	●	●(宿泊)
20	●	●	●	●					
21			●	●					
22			●	●					
23	●	●	●	●					
24	●	●		●					
25	●	●	●		●	●			
26				●			●		
27	●	●	●						
28	●	●	●						
29	●			●					●(温泉)
30	●	●	●	●			●		
31	●	●	●	●					
32		●	●	●				●	
33		●	●						
34	●	●	●				●		
35		●	●		●				
36	●				●				
37		●	●						
38		●	●						●(市民活動支援)
39	●	●	●	●					
40	●	●	●		●		●		
41		●		●					
42	●	●	●						

### 3. 共用空間の構成

#### 1) 施設の機能構成 (表 2)

調査対象施設の 42 施設について、施設全体の機能の複合状況について整理した。集会・会議機能を含むものが 34 施設と最も多く、次いでホール・劇場 (31 施設)、図書 (24 施設)、保健・福祉 (20 施設) と続く。また、集会・会議、ホール・劇場、図書の主要な 3 つの機能を組み合わせたものは 19 施設であった。日常的な各種の文化活動を支える図書、集会・会議機能と、特定の時間帯に利用が集中する収容力の高いホール・劇場を組み合わせることで、日常的な活動と高い集客性をもった賑わいのある文化・交流活動拠点の形成が意図されている。

#### 2) 施設全体の空間構成の類型化 (図 1、表 3)

調査対象施設において、各機能空間をどのように結合して施設全体を構成しているか、主に共用空間に着目して類型化を行った。その結果、「並列型」「共通ホール型」「中庭型」「分棟型」「積層型」の 5 タイプに分類できた。42 施設のうち、最も多いタイプは「共通ホール型」の 25 施設で約 6 割を占める。次いで、「積層型」が 7 施設、「中庭型」が 5 施設、「並列型」が 4 施設、「分棟型」が 1 施設の順であった。各タイプの特徴は以下の通りである。

##### ①「並列型」

各機能に個別の入口が設けられ、機能ごとのゾーニングや管理区分が明確で独立性が高い構成である。機能間は内外の廊下で部分的につながり、相互に結びつけるまとまった共用空間は皆無である。しかし、外観的には、底や屋根、仕上げ等を連続させることで一体の施設であるようにデザインしているものが多い。

##### ②「共通ホール型」

施設共通の入口を設け、共用空間であるエントランスホール (共通ホール) を通過してから各機能空間へと至る構成である。各機能のエントランスホールを兼ねることで、スペースの効率化を図ることができるとともに、利用者の動線が集中することで、賑わいや交流をもたらすことができる。このタイプのほとんどが低層であり、各機能を平面的に配置し、それら相互を共通ホールで連結する構成となっている。最も多いタイプであるが、地方都市のため敷地上的制約が少ないことも一因と考えられる。

エントランスホールの空間は、比較的まとまった広さがあり、誰もが自由に利用できる共用空間であるが、その利用状況は様々である。単に集中する動線を円滑に処理することを主目的にしたものや、休息や会話、待合せ、学習、飲食等のために一部に滞留空間を設けたもの (写真 1)、案内等の情報発信や展示等の機能をもたせたもの (写真 2)、イベントや交流等に利用するため広場的な空間を確保したもの (写真 3)、ホール・劇場のホワイエを兼ねたもの (写真 4)、また、これらを合わせ持った多機能なものなどがみられた。

また、空間面では、吹き抜けを有するものが「共通ホール型」の 25 施設のうち 12 施設あり約半数を占める。エン

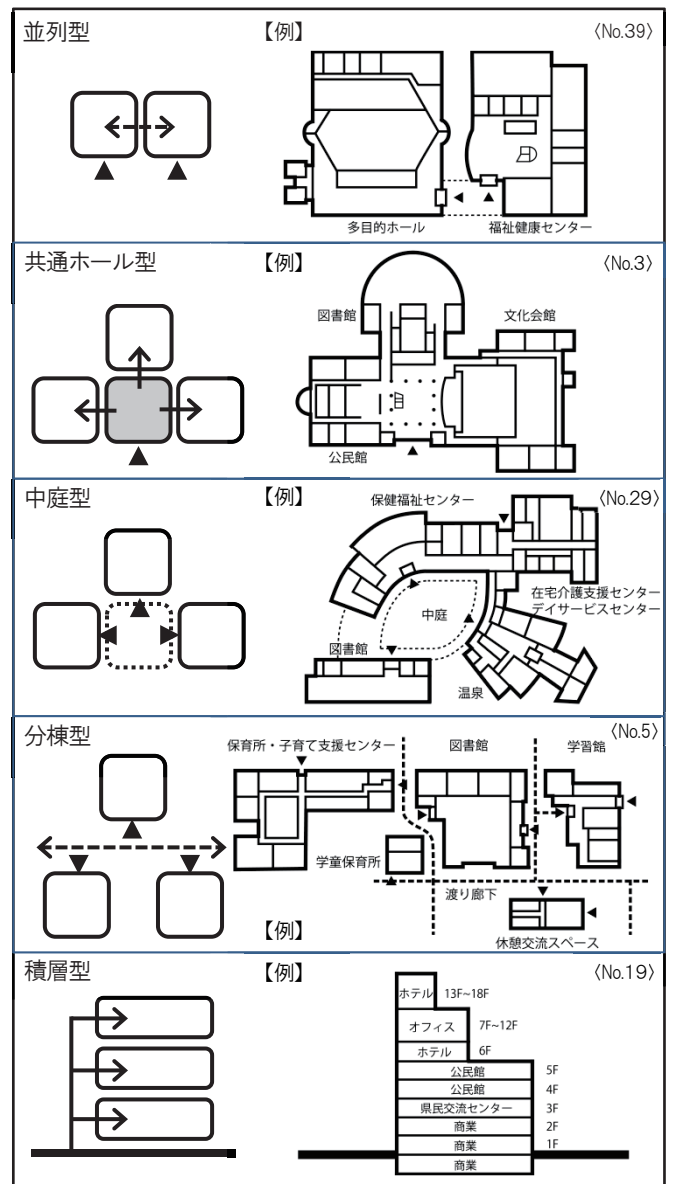


図 1 空間構成の類型

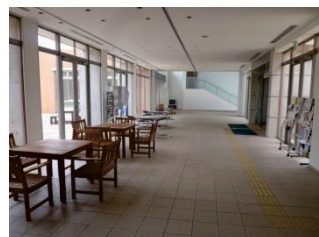


写真 1 滞留空間を設けた空間 (No. 31)

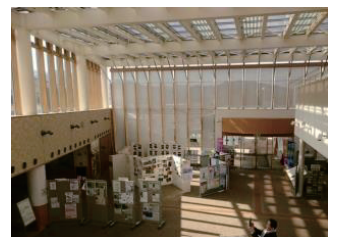


写真 2 情報発信や展示機能をもった空間 (No. 26)



写真 3 イベント等に利用される広場的空間 (No. 37)



写真 4 ホワイエを兼ねた空間 (No. 3)



トランスホールは、大勢の利用者が集中するため、水平方向や垂直方向の広がりがあり、スケールの大きな空間を確保する傾向にある。施設規模が大きく複雑な構成となる複合施設では、空間ボリュームを確保して空間的な中心を際立たせることは、利用者にとっても空間を認知しやすく、わかりやすさをもたらす上で重要である。また、ある種の豪華さや賑わいをもったハレの場を演出する効果も期待できる。しかし一方で、大勢の利用者が集中する場面はイベント時等に限られ、逆に普段は閑散としてしまうケースも見受けられる。

また、施設の中には、開設後、エントランスホールの一部を改修し、機能空間に転用している例もみられた。「藤原文化センター〈No. 2〉」では博物館の展示室に転用され、「北勢市民会館〈No. 1〉」では NPO 法人の事務所等に転用されて、いずれも共用空間の面積が縮小されている。これらは、単に共用空間として広さを確保するだけでは管理サイドから無駄な余剰スペースとして捉えられ、他の用途に利用されてしまう可能性があることを示している。したがって、多様な利用者が訪れる、比較的大きなスケールの複合施設では、日常的利用や個人利用等も想定し、より親近感が得られるように小さなスケールに分節化したり、利用者が過ごしやすい設えや機能をもたせたりするなど、動線面や交流面だけでなく滞留面にも配慮する必要があるだろう。

### ③「中庭型」

施設の中心に設けた中庭を囲むように各機能を配置し、個別の入口が設けられた構成である。機能間は内部廊下で部分的につながるほか、中庭周囲に巡らされた外回廊によりつながっている。しかし、機能相互に結びつけるまとまった共用空間はなく、中庭がその代替となっているといえる。中庭には、緑が豊富な公園的な設えや、石やタイル等で舗装されたイベント広場的な設えがみられる。

### ④「分棟型」

各機能を棟ごとに分離して配置し、半屋外の渡り廊下でつなげた構成である。このタイプは 1 施設のみであるが、「ながしま遊館〈No. 5〉」では、渡り廊下に沿って緑や水路を設け、散策道として整備している。

### ⑤「積層型」

各機能が断面方向に積み重なり、上下階を階段やエレベーター等でつなげた構成である。主に、敷地上の制約などがある市街地や駅前等に立地する施設にみられる。

## 4. 滞留空間の特性

共用空間における滞留空間の特性を把握するために、空間の類型、配置特性、選択性について分析を行った。

### 1) 滞留空間の類型化 (図 2)

共用空間における滞留空間に着目し、建築的要素(壁や柱等の建築的な空間構成要素)と家具との関係から類型化を行った。ここでの滞留空間とは、椅子やベンチ、ソファ、テーブルセットなど、利用者が着席して滞留できる家具が配置された空間を指す。その結果、複合施設内の滞留

空間は、大きく、「コーナー」、「アルコーブ」、「交流ロビー」の 3 タイプに整理することができた。さらに、各タイプを配置の仕方により細分類した。なお、これらの滞留空間を確認できた施設は 38 施設 (90%) あり、「コーナー」を設けた施設は 25 施設 (60%)、「アルコーブ」は 15 施設 (36%)、「交流ロビー」の 8 施設 (19%) であった (表 3)。各タイプの特徴は以下の通りである。

### ①「コーナー」

建築的要素ではなく、家具を設置することにより周囲の空間と分節化されたひとまとまりの空間である。逆にいえば、家具を撤去すると周囲の空間と区別が曖昧になってしまうものである。設計時に意図されることが多いが、家具

表 3 施設別の空間構成及び滞留空間のタイプ

No.	空間構成の タイプ	滞留空間のタイプ										計
		コーナー				アルコーブ			交流ロビー			
		壁際	窓際	吹抜け 際	島 型	壁 際	窓 際	吹 抜 け 際	囲 み 型	開 放 型	独 立 型	
1	並列型	●	●		●							3
2	共通ホール型	●										1
3	共通ホール型						●					1
4	共通ホール型				●		●					2
5	分棟型										●	1
6	積層型	●		●								2
7	共通ホール型	●										1
8	共通ホール型						●					1
9	積層型		●									1
10	共通ホール型				●							1
11	共通ホール型						●					1
12	共通ホール型						●					1
13	共通ホール型											0
14	共通ホール型									●		1
15	共通ホール型						●					1
16	中庭型		●				●					2
17	積層型								●			1
18	中庭型	●	●				●	●		●		5
19	積層型	●							●			2
20	積層型	●							●			2
21	共通ホール型						●					1
22	共通ホール型	●					●					2
23	中庭型											0
24	共通ホール型		●		●		●					3
25	共通ホール型	●	●									2
26	共通ホール型									●		1
27	共通ホール型	●	●									2
28	共通ホール型	●	●									2
29	中庭型		●									1
30	共通ホール型	●	●									2
31	共通ホール型		●									1
32	積層型								●	●		2
33	共通ホール型		●				●					2
34	並列型		●									1
35	共通ホール型	●										1
36	積層型											0
37	共通ホール型						●					1
38	並列型											0
39	並列型		●									1
40	共通ホール型		●				●					2
41	中庭型		●									1
42	共通ホール型					●						1

を配置すれば生み出せるため運用時でも対応できる。そのため、前述のように「アルコーブ」や「交流ロビー」よりも多くの施設で採用されていると考えられる。「コーナー」の一種として、「壁際」、「窓際（外部・中庭）」、「吹き抜け際」、「島型」がある<sup>注2)</sup>。

「壁際」は、壁を拠り所にして滞留用の家具を設置したものである。壁付近に設置する際、壁に沿って設置する場合と、壁の隅に設置する場合がある。「くわなメディアライブ〈No. 6〉」の1階では、ホールのホワイエを兼ねた通路の壁面に沿って一列にベンチが並ぶ。動線沿いにあり、止まり木的に気軽に利用できる。壁を背にする安心感があるが、通路側を向いて座るため個人や短時間での利用に適している。「嬉野ふるさと会館〈No. 35〉」では、エントランスホールの壁の各隅に円形のテーブル席が数セット設置されている。動線上、支障ない隅に設けることで滞留しやすい。閉鎖的な壁で囲まれて外部を望めず、むしろ内側に対して開かれた交流的な性格の高い場所である（写真5）。

「三重県総合文化センター〈No. 18〉」の男女共同参画センター1階では、エントランスホール脇に広めの「コーナー」が設けられている。棚やチラシラック等を用いて「コーナー」の空間をさらに分節化し、滞留機能だけでなく、親子が過ごせるキッズスペース、図書閲覧スペース、イベント案内等の情報提供スペース、学習・研修スペースなどの機能を持たせ、家庭的な環境で様々な情報や人々に出会える場としている。「芸濃総合文化センター〈No. 25〉」では、ホールの壁寄りにテーブル席が設置されている。開設後に利用者のニーズをふまえて学習スペースとして設定されたようだが、窓がないため薄暗く、無機質な会議用テーブルがエントランスから続く石張りの硬質な床に置かれ、冷たい印象を受ける。落ち着き感や快適性に配慮し、採光や仕上げ、家具の工夫が必要であろう。

「窓際（外部・中庭）」は、窓を拠り所にして滞留用の家具を設置したものである。窓は外部に向けて設けたものと、中庭に面して設けたものがあり、開放感を得られるのが特徴である。「白山総合文化センター〈No. 28〉」や「美杉総合文化センター〈No. 30〉」では、エントランスホールのカーテンウォールに面して設定され、明るく開放的で、施設周辺の豊かな自然を眺められる。「芸濃総合文化センター〈No. 25〉」では、施設の中庭を囲むカーテンウォールに沿ってソファが横に並ぶ。中庭側に向く席、通路側に向く席、向かい合って座れる席など、視線の方向に配慮し、ソファの向きを工夫している（写真6）。

「吹き抜け際」は、吹き抜けの手摺や壁を拠り所として家具を設置したものである。このタイプは1施設のみと少ないが、「くわなメディアライブ〈No. 6〉」の3階では、吹き抜けに張り出して設置されており、ガラスの手摺やトップライトにより、明るく開放的で、吹き抜けを通して施設内を見渡すことができる（写真7）。

「島型」は、壁や窓等を拠り所とせず、滞留用の家具を設置したものである。「大山田コミュニティプラザ

〈No. 4〉」では、ホールのホワイエを兼ねたエントランスホールの中心にソファを島状に集中させて設置し、まとまり感を持たせている（写真8）。壁や窓から離れ、周囲を動線が巡るため、落ち着き感に欠けるが、柱が中心部に数本あり、それが拠り所となっている。窓から遠いためトップライトを設けて採光を確保しているが、眺望は得られない。「サンデルタ香良洲〈No. 24〉」では、トップライトがなく照明を設けているが、普段は管理上、消灯されており暗い印象を受ける。「島型」を採用する際は、壁や窓以外の拠り所となる家具を配置し、採光への配慮が必要であろう。

## ②「アルコーブ」

建築的要素により周囲の空間と分節化し、意図して囲われ感をもたせた比較的小規模な空間である。「コーナー」よりも囲われ感があり、一般に、共用空間の周囲に設けられ、落ち着いた滞留に利用されることを意図している。壁





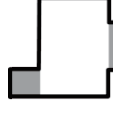
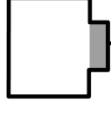
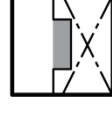
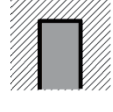

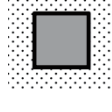
類型	細分類			
	【壁際】	【窓際(外部・中庭)】	【吹き抜け際】	【島型】
コーナー				
アルコーブ				
交流ロビー	【囲み型】 	【開放型】 	【独立型】 	

図2 滞留空間の類型

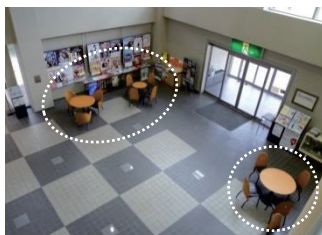


写真5 コーナー（壁際）  
〈No. 35〉



写真6 コーナー（窓際）  
〈No. 25〉

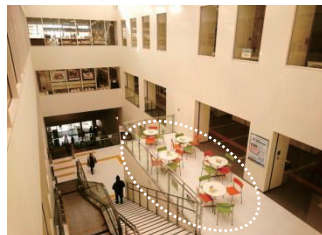


写真7 コーナー（吹き抜け  
け際）〈No. 6〉

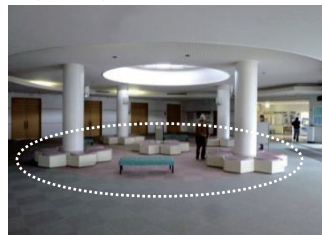


写真8 コーナー（島型）  
〈No. 4〉



で囲うだけでなく、床のレベル差や天井高さの違いなどを用いて分節化することもある。また、視覚的に透過性のあるガラスの扉や間仕切りで分節化することもある。「アルコーブ」の一種として、「コーナー」と同様に「壁際」、「窓際（外部・中庭）」、「吹き抜け際」がある。

「壁際」は、壁を凹型に窪ませて、内側に滞留用の家具を設置したものである。このタイプは1施設のみと少ないが、「熊野市文化交流センター〈No. 42〉」では、エントランスから奥へと続く通路の壁の一部を窪ませ滞留空間を生み出している（写真9）。通路に沿って「アルコーブ」を千鳥配置的に複数カ所所在させ、移動と滞留のリズムをもたらしている。壁面には絵画等が掛けられ、壁際に造り付けのベンチを設けているが、壁を背にしてベンチに座る人の通路側を向く視線と、通路側から絵画を鑑賞する人の視線とが互いに向き合うことになり干渉が生じている。視線の向きに配慮し、ベンチを壁から離すことも必要であろう。

「窓際（外部・中庭）」は、外部や中庭に面した窓と壁で三方を囲み、滞留用の家具を設置したものである。囲われ感は「アルコーブ」の間口（幅）と奥行との関係により異なる。「あさけプラザ〈No. 12〉」では、エントランスホールから中庭側に張り出す形で、間口が広く奥行の浅い「アルコーブ」が設けられている（写真10）。窓際にはカウンター席があり、人通りに背を向けながら中庭を眺めて過ごすことができ、プライベート感が得られる落ち着いた空間となっている。また、背もたれのないベンチも置かれ、中庭向き、通路向きのどちらでも選択可能である。中央には柱があり空間の分節化に寄与している。「スター21〈No. 8〉」では、間口より奥行きが深くなっており、また天井を一段下げることによって、より囲まれ感がある。読書コーナーとして本棚も設えられ、全面開口の窓を通して中庭の緑を眺めながら、読書や休憩など、個人滞在も可能な空間となっている。「津市西部市民センター〈No. 22〉」では、外庭に張り出している。壁による囲われ感をもたせつつ、

庭側には吹き抜けの大きな窓を設けて木々を望めるようにし、明るさや開放感をもたせている（写真11）。また、住宅のリビングのようなスケール感で、落ち着きと居心地の良さをもたらしている。「ふるさと会館いが〈No. 33〉」では、円形状の「アルコーブ」が前庭に張り出している。自販機が設置された休憩スペースで、エントランスホールとは、ガラスの間仕切りで区画されているが視覚的にはつながっている。「アルコーブ」を設ける際は、個人でも過ごしやすいよう囲われ感を持たせると同時に、外部や中庭、他者との関係にも配慮する必要があるだろう。

「吹き抜け際」は、吹き抜けに面する手摺や壁で囲み、滞留用の家具を設置したものである。このタイプは1施設のみと少ないが、「三重県総合文化センター〈No. 18〉」の2階では、生涯学習センターのロビーの吹き抜けに手摺壁を張り出して設けている（写真12）。厚い手摺壁で囲まれ、開放的な吹き抜け空間の中にありながら、座れば周囲から隠れ、ひっそりと過ごすことができる。

### ③「交流ロビー」

滞留だけでなく、時にはイベントなどで多目的な利用を促し、多様な人々との交流などを期待して用意された、ある程度広がりのある空間である。一般に、複数の家具が空間全体に分散して配置される。「交流ロビー」の一種として、「開放型」、「囲み型」、「独立型」がある。

「開放型」は、外部に面して窓を設けた開放的な空間である。「三浜文化会館〈No. 14〉」では、扇型をした空間全体に4人掛けのテーブルセットが分散して配置されている（写真13）。イベント時のレイアウト変更に対応できるが、すべて同じ丸テーブルでバリエーションが少なく、柔軟に机を組み合わせるなどの対応ができない。「三重県総合文化センター〈No. 18〉」の3階では、半円形の空間が設けられ移動しやすい家具で構成されている。普段はイベント等の情報発信と個人やグループの学習の場として使われ、時折、イベントスペースとして活用されている。「芸濃総合



写真9 アルコーブ（壁際）  
〈No. 42〉

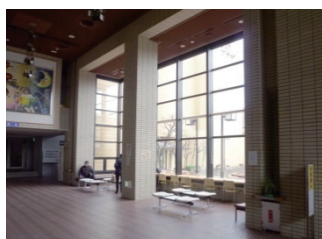


写真10 アルコーブ（窓・中庭）  
〈No. 12〉

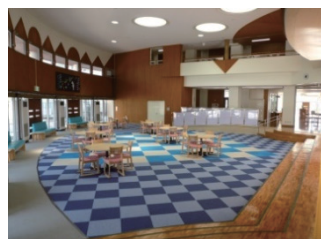


写真13 交流ロビー（開放型）  
〈No. 14〉

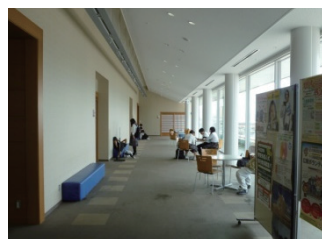


写真14 交流ロビー（開放型）  
〈No. 32〉



写真11 アルコーブ（窓・外部）  
〈No. 22〉



写真12 アルコーブ（吹き抜け際）  
〈No. 18〉



写真15 交流ロビー（囲み型）  
〈No. 19〉



写真16 交流ロビー（囲み型）  
〈No. 32〉

庁舎〈No. 26〉」では、芝生広場に対して開いた空間で、カウンター席、円形テーブル席、大テーブルとバリエーションがあり、個人からグループまで対応可能である。仕上がりも木材を多用して落ち着き感がある。「ハイトピア伊賀〈No. 32〉」の5階では、多目的ホール前に設けられ、イベント時は展示ギャラリーやホワイエとなり、イベント時以外は休憩スペースとして一般開放されている（写真 14）。駅前に立地し、パノラマ的に街を見渡せる絶好の眺望場所でもあるため、中高生から高齢者まで様々な人が思い思いに過ごす場所にもなっている。

「囲み型」は、諸室等により囲まれた空間である。「アスト津〈No. 19〉」の3階では、諸室で囲まれた広々とした空間に、大小様々な家具が設置されている（写真 15）。個人からグループ・団体まで幅広く利用でき、各自が状況に応じて選択することができる。ただし、市民活動支援との兼ね合いから学生の学習目的の利用は制限されている。「鈴鹿市男女共同参画センター〈No. 17〉」の3階では、多様な集まりを想定し、レイアウト変更がしやすい分割可能なテーブルを採用している。周囲は研修室やホール、印刷室等の諸室に取り囲まれ、外部に面した窓はわずかで照明も薄暗く、閉鎖的である。「ハイトピア伊賀〈No. 32〉」の3階では、情報交換、相談、展示・発表等、多用途に活用できる空間として、レイアウト変更が可能な家具や、プロジェクターやスクリーンを組み込んだシステムが天井に設置されている（写真 16）。一般に開放されているが、取り囲む諸室はオフィス等が多く、市民が気軽に利用できる場所となっていない。「囲み型」を設ける際は、特に外部や周囲の諸室との関係に配慮する必要があるだろう。

「独立型」は、他の建物と分離して設けたものである。「ながしま遊館〈No. 5〉」では、散策路沿いに独立棟として設けられ、飲食や休憩、物販等に利用されている。室内には4人掛けと6人掛けのテーブル席が設置され、思い思いに過ごせる空間となっている。他の建物と分離している

ため、アプローチや入りやすさの配慮が必要であろう。

## 2) 滞留空間の配置

滞留空間の配置を、エントランス付近、諸室付近、施設中心付近、奥まった位置に分けて、その特性をみる。

エントランス付近に配置された事例をみると、「陽だまりの丘複合施設〈No. 7〉」では、滞留空間が管理事務室からの視線を受ける位置にあり、監視されているようで落ち着き感に欠ける（写真 17）。その点、「朝日町教育文化施設〈No. 15〉」では、近くに事務室はなく、また囲われ感のある「アルコブ」の空間のため、監視の目を気にすることなく落ち着いて過ごせる（写真 18）。また、入口付近で入りやすく飲食も可能で利用上の自由度も高い。「あやま文化センター〈No. 31〉」では、エントランス正面の中庭に面した部分に配置されている（写真 1）。利用者にとって、入ってすぐに自分を受け止めてくれる場所が用意されていることは、初めて訪れた人にも安心感を与えてくれるであろう。「サンデルタ香良洲〈No. 24〉」では、エントランス脇に配置することで、他の来館者との自然発生的な交流の機会を生んでいる。ただ、そこに人がいることで逆に入りづらさを感じる人もいると思われるため、場所をもう少し玄関から離したり、衝立等で緩やかに仕切ったりするなどの対応が必要であろう。このように、エントランス付近に配置する場合は、管理上の監視性を軽減するため、事務室からの視線を和らげる工夫や他の来館者との関係、入りやすさへの配慮などが必要であろう。

諸室付近に配置された事例をみると、「青山ホール〈No. 34〉」では、図書館の前室となる位置に配置されている。静粛性が求められる図書館内から解放され、気分転換や会話、飲食などが行える場所となっている（写真 19）。また、図書館の閲覧室としても兼用されており、相互に行き来がみられる。「ハートプラザみその〈No. 39〉」の2階では、ボランティアセンターの一部を共用空間に開放し、誰もが気軽に滞留できるカフェ的なスペースとしている



写真 17 エントランス付近  
(No. 7)



写真 18 エントランス付近  
(No. 15)



写真 21 施設中心付近  
(No. 3)

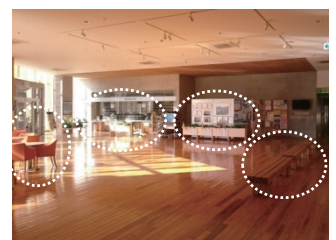


写真 22 施設中心付近  
(No. 30)



写真 19 諸室付近  
(No. 34)



写真 20 諸室付近  
(No. 39)



写真 23 奥まった位置  
(No. 15)



写真 24 奥まった位置  
(No. 24)



(自販機、コピー機、公衆無線 LAN 完備) (写真 20)。「磯部生涯学習センター〈No. 40〉」の2階においても、磯部支所の待合ロビーを同様に開放している。このように、諸室と共用空間の境界部を硬い壁で閉ざすのではなく、諸室の一部を共用空間に対して開放し、共用空間へはみ出したり、機能的に補完関係を持たせたりして、相互につなげることも重要であろう。

施設中心付近に配置された事例をみると、「東員町総合文化センター〈No. 3〉」では、中央公民館、図書館、文化会館の3つのゾーンを結びつける中心的な位置に、吹き抜けをもった正方形の広場的空間(町民ロビー)があるが、その空間の脇に「アルコーブ」が設置されている(写真 21)。町民ロビーより床を一段下げて仕上げをカーペット敷とし、天井高も抑えて中庭に面した窓を設けるなど、隣接する町民ロビーとは対比的な落ち着いた空間となっている。「美杉総合文化センター〈No. 30〉」では、エントランスホールを中心にして、多目的ホール、役所窓口、図書館、保健センターが取り囲むように配置されている(写真 22)。エントランスホールと周囲の各機能との境界部には、各機能と関連した幾つもの「コーナー」が配置され、エントランスから様々な「コーナー」を見渡すことができ、わかりやすさによる親近感や賑わいが感じられる。このように、施設の中心付近では、人々が集まることによる賑わいと、少人数でも過ごしやすい落ち着き感の両立を図る工夫が求められる。

奥まった位置に配置された事例をみると、「朝日町教育文化施設〈No. 15〉」の2階では、廊下の突き当りに配置され、見晴らしの良い窓に面してカウンター席や小さなテーブル席が設えられている(写真 23)。パブリック空間においては、他者と距離を置いてゆっくり一人で過ごせるプライベート感のある場所も必要であろう。「サンデルタ香良洲〈No. 24〉」では、横に伸びる共用空間の奥に配置され、庭を眺めながら落ち着いて過ごせる(写真 24)。ここは、図書館のブラウジングコーナーでもあり、図書館の機能空間と共用空間の境界部として、ドアや壁で仕切らずに双方を緩やかにつなげている。また、図書館の一部を共用空間にはみ出すことで、エントランスから奥まった位置にある図書館への視認性が高まり、奥へと誘引する効果もある。このように、奥まった位置では、個人利用や落ち着き感、視認性、機能空間との関係などに配慮する必要がある。

### 3) 滞留空間の選択性

施設別に滞留空間のタイプ数をみると、1 タイプのみが22 施設(52%)で、2 タイプ以上を有するのは16 施設(38%)と少なく、全般的にみてバリエーションに劣るといえる(表 3)。「いせトピア〈No. 37〉」は、「アルコーブ」(窓際)のみの1 タイプであるが、3 階建の各階に設けられている。1 階は中庭に張り出した飲食可能なカウンター席中心の休憩スペース、2 階は一般利用者の休憩・会話用のソファ席、3 階は学生等の学習用にテーブル席を設えるなど、家具の設えによりバリエーションを持たせている。「サンデ

ルタ香良洲〈No. 24〉」では、「コーナー」(窓際・島型)、「アルコーブ」(窓際)が、同一フロアのエントランス付近、中心付近、奥まった位置に存在する。各タイプが分散しつつも、相互に視覚的につながる距離感にあり、状況に応じた場所の選択が可能である。「三重県総合文化センター〈No. 18〉」では、「コーナー」(壁際・窓際)、「アルコーブ」(吹き抜け際・窓際)、「交流ロビー」(開放型)が、階や棟に分かれて存在し、さらに外部の中庭にも滞留空間がある。施設規模が大きく、バリエーションが豊富で場所の選択性が高い。このように、利用者の多様な過ごし方や、他者との距離感に対する要求に応えられるよう、滞留空間のタイプや家具等の設えによってバリエーションを持たせ、利用者が選択できるようにすることが重要であろう。

## 5. まとめ

本研究では、公共複合施設の共用空間の構成について分析し考察を行った。まず、施設全体の空間構成を類型化した。その結果、5 タイプに分類でき、「共通ホール型」が約半数と最も多く、このうち吹き抜けのある施設も約半数みられた。このスケールの大きな空間は、イベント時以外は閑散とするため、日常利用や個人利用等も想定し、より親近感が得られるように、小さな空間に分節化し、利用者が過ごしやすい設えのある滞留空間を設けることが必要であろう。

次に、共用空間における滞留空間について類型化した。その結果、「コーナー」「アルコーブ」「交流ロビー」の3 タイプに分類でき、その特性を整理した。滞留空間の類型を施設別にみると、1 タイプのみが過半を占め、バリエーションに劣ることがわかった。複合施設では単独施設よりも多様な利用者が訪れることから、多様な過ごし方を許容する必要がある。設計の際には、滞留空間のタイプの特性をふまえ、過ごし方や人数規模、状況に応じて選択できるよう、バリエーションをもたせながら共用空間の各所に配置し、選択性を高めることが必要であろう。

今後は、個別の滞留空間の評価・計画方法も検討していきたい。

## 参考文献

- 1) 小松 尚、小篠 隆生：公共空間としてのボローニャ市立「サラボルサ図書館」に関する考察、日本建築学会計画系論文集、739 号、2227-2237、2017. 9
- 2) 津市公共施設等総合管理計画、津市、2017. 1
- 3) 広田 直行、山口 高嗣：コミュニティ施設の複合化事例にみる共用スペースの構成 横浜市地区センターを対象として、日本建築学会技術報告集、29 号、195-200、2009. 2
- 4) 北出 宣之、渡邊 昭彦、吉村 紀一郎：生涯学習センターの複合化に関する研究、学術講演梗概集、E-1、369-370、1998. 7

## 注

- 注 1) 平成 26 年 4 月 22 日付 総財務第 74 号 総務大臣通知  
注 2) コーナーとは、一般に隅や角を意味する語だが、ここでは、隅や角以外の部分も含む。